

全 縱 白 書

六甲全縦市民の会 初代会長 故 大 西 雄 一

はじめに

六甲連山の麓には、神戸市をはじめ芦屋市、西宮市、そして阪神地域、大阪へと続いています。

この地域に住む約500万人の人々が、毎日、この山を仰いでそれぞれの生活を営んでいます。

大都会に接し、交通網は整備されています。また、レクリエーションの場としての機能も整ってきました。それでいて、歩いて楽しむのに支障になっていません。

六甲山は1,000mに満たない山(最高峰931.3m)ですが、意外と山域は広く、山容は複雑多様で変化に富み、案外高山性の特徴を備えたおもしろい山です。

何時でも、気安く、ほんのわずかな時間でも、年齢、性別、趣味、能力の如何にかかわらず、あなたの都合に応じて付き合ってくれますし、楽しめてくれます。若葉のささやき、清流の語らい、あじさいの妖しさ、紅葉の艶やかさ、そして霧氷の冷たさ、霧の幻想…。

このように六甲山が市民の日常生活に密着し、親しまれてきたことは、明治中期以降の自然と人の交流の歴史によるものです。

(1) 六甲山の歴史

六甲山の歴史

六甲山は、元来、老廃期の花崗岩地で、明治中頃までは、風化が激しく崩れやすい荒地でした。当時の住民にとっては、六甲山は内陸部と海辺地域との南北交通を妨げる障壁であり、日常的には単なる薪炭類の供給地でしかありませんでした。

それを、楽しみの場として活用することを教え、指導し、開拓してくれたのは、その頃神戸に居留していた外国人たちでした。故国を遠く離れた地に住む彼らは、故郷の習慣や山野散策や狩猟を楽しむ場を求めて、背後の山地(再度山、摩耶山から西六甲あたりまで)を歩きまわりました。

彼ら神戸の外国人たちは、荒涼としたこの六甲山地に秘められた価値を見出しありに協力しあって登山コースの開拓、維持管理等に尽力奉仕しあいました。

A. H. グルーム、H. E. ドーント、H. シェール、J. ワーレン、B. アブラハム、T. パワーズら、その他大勢で、六甲山の開発も充実し発展してきました。

その中心的な人物が、貿易商の英国人

A. H. グルームです。荒涼としたこの山地に秘匿された価値を見出し、市民のための六甲山開発を発意しました。明治28年、西六甲の山頂部に山荘を建て、多くの友人たちをも誘って別荘を建てさせました(明治43年には別荘数56戸)、ここを根城に山路改修、植林、砂防などに努めました。また時の服部県知事らにも親しく、六甲山開発を進言するなど、献身的な努力を続けました。

そして、明治36年には、西六甲に日本最初の公式ゴルフ場(現神戸ゴルフ倶楽部)を創設して、周辺開発の核としました。

明治中頃には、県や市の山地改良事業もようやく始められ、内陸部との南北交通が整備開発されだしました。

明治30年代になると、山中に水道の貯水池ができ、その水源涵養等のために砂防工事、増植林など山地の改良事業が進められてきました。

登山の勃興

こうしたことから、在留外国人たちの山歩きは、ますます活発になってきましたが、彼らの登山活動に大きな影響を与えたのは、英国人のW. ウェストンです。彼は元来本場の著名なアルピニストで、明治21年~28年にかけ、神戸に居住し、神戸を基地として日本各地の高山岳を歩きまわり、日本近代登山の黎明期の先駆

者、指導者となりました。

W. ウェストンは、その神戸居住期間中に、グルームやドーントなどと親しく交わり、ともに六甲山を歩き、在神の山仲間に日本アルプスなどの高山岳を紹介し、登山の啓発、指導を行いました。

「日本アルプス・登山と探検」

W. ウェストン著

帰國の翌年、ロンドンで出版。日本の山岳が世界に紹介された最初の文献

特に、ドーントは、日本山岳会会員となり、日本アルプスなど各地の山を仲間と登り、その情報や記録を中心とした山岳誌「INAKA」を著述し、日本山岳会に貢献しました。

「INAKA」全18巻(日本最初の山岳専門誌)

H. E. ドーント著

このように神戸在住の多くの外国人たちが活躍し、登山クラブMGCK(The MountainGoats Club of Kobe)をつくり、六甲山をはじめ広く日本の山岳を歩きました。六甲山域に英語の地名やコース名が多いのはこうした由来からです。

市民の山への開眼

こうした外国人の背山での活動を日常身近に見てきた市民は、その影響を受け、これまで習慣がなかった登山への関心

が沸き上がってきました。

こうした機運のなか、貿易商の塚本永堯らが中心になって、明治43年、関西最初の登山団体、神戸草鞋会（後の神戸徒步会KWS< Kobe Walking Society>、その後関西徒步会に改称）が設立されました。毎日登山やハイキングにとどまらず、登山路の開拓、維持、改修に努め、さらに登山地図や機関誌ペデスツリアンを発行するなど登山の普及発達に努力しました。

やがて、このKWSの活動は、近代スポーツ登山の風潮のなかで、地元六甲のみならず各地の高山岳や積雪期登山、スキーの普及と、めざましく発展してゆきました。

毎日登山やハイキングが市民の間に定着するにつれて、あちらこちらに登山会が創立され、大正時代には市内で数百を超えていました（当時、1日あたり登山者数は、平日で2万人、休日は4万人以上と記録されています）。

近代スポーツ登山の先駆者たち

大正期の終わり頃から昭和にかけて、ヨーロッパの影響を受けて、近代アルペニズムスポーツ登山が盛んになり、高山岳への登高が指向されました。

その真髓としてのロッククライミングの習得を目指す気鋭のクライマーたちが台頭してきました。

藤木九三とその仲間が、大正13年、登

山グループRCC (Rock Climbing Club) を結成しました。岩登り技術の練磨と登高精神の高揚は、やがてめざましいパイオニア的実践活動となり、数多くの登山家を輩出し、日本近代登山術の向上発展に大きく寄与しました。

藤木九三、加藤文太郎、直木重一郎、水野祥太郎、西岡一雄、津田周二らです。

その岩登りのゲレンデとして六甲山地が開拓され、今日でも多くのクライマーで賑わっています。芦屋ロックガーデン、仁川渓谷バットレス、六甲山上の保星岩、道場の不動岩、百丈岩、菊水山の妙号岩、西宮の蓬萊峠などがそれです。

(2) 市民の山—六甲

六甲山は、登山のほかにもウインタースポーツの場ともなっていました。スキーやスケートは、外国人たちやKWSのメンバーらが、山上のゴルフ場や池などをゲレンデとして関西では最も古く、大正初期からすでに馴染んでいました。

やがて但馬地方の冬季登山やスキーゲレンデの開発指導となりました。

このように、明治以降、六甲山は市民生活に直結しています。

その一例が、神戸市民の日課、毎日登山です。朝食や出勤前に自宅から手近な山筋コースで、互いに朝のあいさつをかわしながら、小鳥の伴奏のなか緑の小路を登っていきます。大正時代に始まる日

常行事です。毎日盛んで楽しんでいます。

また、夏の夜の夕食後、ちょっと涼みに……、と家族連れて六甲山や摩耶山に行きます。ケーブルや車では、ほんの30分で行けます。

休日にはハイキング、家族連れでも、友達とでも、山の仲間とでも、相手次第、都合次第で、どんなコースでもお好みのままに楽しませてくれます。ザイル扫一のアルペニストの岩場、恋人同士のムードいっぱいの囁き小路、子どものお供で教育の森や、冒険気分のやせ尾根など、誰にでもわが裏山のお座敷はいつも開放されています。

ハイキングコースだけでも、定評のあるものだけで50有余。年間を通して賑わっています。

山の自然に親しみ、遊び、育まれているのが、神戸市民といえます。いうなれば、六甲山は、誇り高きわが市民の庭なのです。

こうして、長い歳月をかけて、幅広く厚い層の多くの人々の限りない愛情と努力とが凝集した伝統のなかに、わが六甲山は成長し発展してきました。六甲山は、誇り高き市民の山である所以です。

(3) 全縦とは

神戸の後背に連なる緑のびょうぶ六甲連山。西は須磨の山塊から、高取山、菊水山、摩耶山、六甲山、そして東端の宝塚へと連なっています。この連山—全行

程約56km余、登る高さの累計約3,000mを、稜線をたどりながら、1日のうちに、自らの責任で走破するのが、六甲全山縦走です。

もともと全縦は、アルペニストの六甲登山の総仕上げ—卒業証書—として、アルペニストに必須の体力と精神を鍛え上げるものとして行われていました。

綿密な計画のもと、何回かに分けてコースを試行し、コースに迷わないように、同時に、時間と体力の配分を測りながら、どんな悪天候にも対応できるように装備等にも細心の注意をはらい、やっと実行に移されたものです。

縦走が初めて文献に登場するのは、大正14年11月29日、RCCの3人のメンバーが須磨浦公園の敦盛塚～塩尾寺間の六甲山脈大縦走を行ったとするもので、当時新聞にも大きく報道されました。

その後、登山団体も、六甲登山の総仕上げとして盛んに縦走を行っているほか、研修・訓練の場として行われています。

全縦を行うとは、六甲山系の大自然を舞台に、自らの体力と、精神力を高め、その限界に挑むもので、これを通して、自然と人との考える場です。

このように、全縦は重みと誇りのある、アルペニスト、ハイカーのステータスのひとつとなっています。

六甲山系の登山大会等

○大正11年 第1回神戸アルプス縦断徒步競争大会（地元新聞社主催）

大倉山公園～善太郎茶屋～鍋蓋山～臍岩～鳥原貯水池～湊川遊園地

大正12年 鴨越横断競走大会（第2回大会）

湊川遊園地～夢野～高尾山～白川～板宿～蓮池～湊川遊園地

大正13年 山岳競走大会（第3回大会）

湊川遊園地～塩ヶ原～二軒茶屋～臍岩～鳥原水源地～湊川遊園地

○六甲山脈大縦走（文献上最初の縦走）

大正14年 敦盛塚～鉢伏山～高倉山～横尾山～那須墓～高取山～奥山新田

～清水谷水車路～城ヶ越山～鍋蓋山～再度山～市ヶ原～摩耶山

～前ヶ辻～六甲最高峰～船坂峠～塩尾峠～宝塚

(4) KOBE 六甲全山縦走大会

足 跡

そもそも六甲全縦は、地元では登山家のトレーニングの仕上げ、また一般ハイカーの卒業証書であり、さらには、研修の場として、自己の責任で成し遂げる大変厳しいものなのです。

平素のハイキングとは異なるこの全縦の努力と喜びの醍醐味を、広く市民に紹介してはどうか。憧れの全縦をやってみたいが登山団体には無縁だし、適当な指導者も知らないので機会がない……そんな市民にチャンスを提供することができないか……。これが、この大会の発端です。昭和50年のことでした。この行事は、自らの自覚と責任のもと、自己の体力と精神を鍛え、目的を達成する喜び、そして神戸のまちと自然、人のふれあいをはかる行事として発展してきた“歩くスポーツの祭典”です。

市民の会の設立

昭和50年、51年と実施してみると、予想以上の人気がありました。何よりも注目したのは、この山行の烈しさ、苦しさが広く市民に歓迎されたことです。

苦行のなかに真実を求め、その汗のなかに自己を確かめ、知ろうとする真摯な態度は、主催者を感激させました。

こうした状況のなか、第2回の昭和51年度の大会を終了した時点で、ごく自然に、全縦を手伝い、協力した市民の側から、次のような声が沸きあがってきました。

「全縦は、市役所に据膳してもらうものではない。われわれ市民自体が、自分のこととして、市と共同して実施に関与すべきだ。」

こうして、登山団体や登山家、無線グループや医師、その他多くの市民有志が集って、六甲全縦市民の会が生まれました。お手伝いではなく、市民自らのなす

べきこととして参加し、市と共に運営することになりました。

市民の支援

山と結びつき、山に理解のある市民一神戸市民ならではの協力によってこの行事は成り立っています。

早朝から深夜にかけて大勢の参加者が歩きます。参加者のマナーとともにコース沿いの市民の理解がなければできません。ざわめき、物音、ゴミなどマナーが散漫になると、反対にあります（現に、過去何回かコースを変更せざるをえなくなりました）。

また、運営に多くのボランティアがかわっています。昭和52年度の大会

から、公募しましたが、たちどころに200人を超える人たちが集まりました。山の中のチェックポイントでのチェック、縦走路を行く参加者をアドバイスし、事故防止や情報連絡など円滑な運営に寄与するパトロールなど、早朝から深夜にかけての手弁当の奉仕です。六甲を愛する市民が、それぞれの豊富な経験と持ち味をいかして参加しています。励ましあい、助けあい、和気あいあいと、行事の運営に携わっています。

主催者と、ボランティアの市民と、参加者が一体となって、行事を進めています。互いに行事の意義と市民の心意気とを、じかに感じあつていればこそです。この連帯のなかに、わがまち神戸の、自然と人とを改めて認識し、感動する、こ



摩耶山上での「摩耶山を守ろう会」の方々によるホットレモンサービス

れこそ本当の市民文化というべきもので、全縦のもうひとつの良さです。

神戸の秋まつり

昭和50年秋に始まった山脈縦走の大会。かなり厳しい登り下りを繰り返し、自分の足で、自分の責任で、ただひたすらに、登りに登り、歩きに歩く。青少年、壮年、老年、男性、女性……。

49年間で、延べ申込み205,153人、参加164,233人、うち完走した人は137,599人となっています。

完走した人も、途中で断念した人も、必ずといってよいほど、また、来年の成功を期してお互いにあいさつを交わして、明るく山を下りていきます。

参加する人だけでなく、その家族や職場、誰彼となく声援し、この行事の前後は、この話題でもちきりとなっています。



須磨浦公園スタート地点

まさに神戸の秋のおまつりであり、神戸の歳時記となっています。

全縦はどうでした

こんなシンドイ、エライ、アホラシイ行事に、なぜこんなに多くの市民が熱中し、応援するのでしょうか。

○ほんとにエラカッタ、シンドカッタ。歯をくいしばって頑張りました。ヤッタと思った瞬間、へたりこんでしまったが、心は軽々と天にも昇る気持ち！

○自分の能力の限界への挑戦でした。明日への自信が沸いてきました。

○やっと何回目かに実現しました。感激です。私にもこんな根性があったのか、我ながら驚いています。

途中でやめた人たちは

○トレーニングに精出して、また来

年出直します。失敗やったけど、ええ気持ちですわ。

○若いからいけると思ったが、甘かった。

○自分との闘いで、とても苦しかったが、貴重な経験－人生の想い出として。

○いろんな人に会えて、お世話になって、とてもうれしく、ありがたかった。

全縦参加者たちは、異口同音に、自己の能力への挑戦だ、わが根性の試練だった、と言っています。

完走した者は、自分の活力に自信を得るし、できなかつた者は、次のチャンスを期して、それまでの努力を誓って精進します。

この全縦の姿のなかに、六甲山、あるいは山との関わりあいの厚みと広さを感じることができます。

参加者とボランティアが、六甲の自然を通してふれあう、全縦のロマンが

ここにあります。

他地域からの参加

この行事は、神戸のユニークなスポーツ行事として、全国から注目されていました。各地から、熱心な参加希望が続々寄せられたのです。

昭和60年、神戸市は市として「国際スポーツ都市」宣言を行いました。これは市民のスポーツ活動の推進と、広く内外の多くの人に機会を開放し、スポーツを通して交流をはかることを期しています。

この趣旨を理解し、市域外からの参加を歓迎し、広く市民とスポーツ交流していくため、昭和61年から全国から参加できるようにしました。今では東は北海道、東北……西は九州・沖縄に至る全国都道府県から参加されています。ご苦労様！

※全縦白書の記載内容については、参加者数を除いて掲載当時の内容です。

全国から参加の方々へ

六甲全山縦走大会のご参加を心から歓迎いたします。

この大会は、既述のような趣旨と経緯で開催しています。神戸市民が、多年にわたり日々と築いてきたことをご理解・ご協力賜りまして、わが神戸、わが六甲山を、愉しんでください。

ご成功を祈ります。

六甲全縦は
わがロマンチック街道
根性の血が滾り
友情の花が咲く
ここ 天と地の狭間に
全山は 火と燃える

◆◆ ◆◆

昨日から今日へ そして
希望の明日へと繋がる
この真摯な切点の只今
切なる想い 哀歎を凝縮して
わが市民は 高らかに歌いあげる

◆◆ ◆◆

まこと 六甲は
われら市民の
生活の糧 生活の詩

大西雄一氏は六甲全山縦走市民の会発足以来、1994年10月1日に逝去されるまで会長をつとめられ、六甲全山縦走大会の発展に大きく寄与されました。

六甲全山縦走市民の会
会員一同